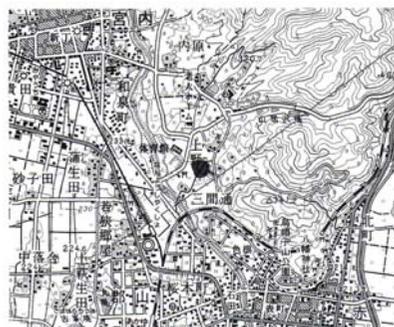


# わのいせき 上野遺跡 調査説明会資料

2006年6月15日（木曜日）

財団法人山形県埋蔵文化財センター

遺跡番号	平成16年度新規登録
調査回数	第二次
所在地	南陽市大字上野字上野四他
調査委託者	山形県置賜総合文庁産業経済部農村整備課
調査原因	農地環境整備事業（上野地区）
調査面積	2,500 ㎡
現地調査	平成18年5月8日～6月16日・平成18年9月4日～9月22日
遺跡種別	集落跡
時代	縄文時代（中期）、平安時代、中世・近世
遺構	河川跡・土坑・杭跡・柱穴・溝跡
遺物	縄文石器、須恵器、陶磁器、木製品
調査担当者	調査第一課長 野尻侃・主任調査研究員 須藤孝宏（調査主任）・調査研究員 菅原哲文
調査指導	山形県教育庁教育やまがた振興課文化財保護室
調査協力	山形県教育庁置賜教育事務所・南陽市教育委員会・南陽市農林課・上野フルーツランド整備推進協議会



第1図 遺構配置図 (S=1:25,000)

## 1 調査にいたる経過と概要

上野遺跡の緊急発掘調査は、南陽市上野地区における県営農地環境整備事業計画に伴い、実施されたものです。すでに昨年度中に、事業に係る3,050㎡について第一次調査が実施されており、縄文時代の土坑・平安時代の土器埋設遺構・中世から近世にかけての掘立柱建物跡等が検出されました。今年度も引き続き事業が実施されることから、県教育委員会は、平成17年12月に平成18年度事業計画地区内を対象に10箇所のトレンチを設定し、埋蔵

文化財の所在の有無を調べる試掘調査を実施しました。調査の結果、中世のものと考えられる遺構・遺物が検出されたことを受け、県教育委員会と山形県置賜総合文庁産業経済部農村整備課とが協議して、記録保存のための第二次緊急発掘調査を行うこととし、山形県埋蔵文化財センターに調査を委託することになりました。

第二次発掘調査は、平成18年度の事業区域のうち本工事で切土となる約2,500㎡を対象として実施されますが、このうち5月8日から6月16日の期間で調査を行った面積は約1,900㎡です。調査区は、5月から6月にかけて調査を行った水田部分については、区内を南北に通る農業用水路を境にして、西側を8区、東側を9区と設定し、9月に調査を行う予定の果樹園部分を7区としました。

## 2 遺跡の立地と環境

上野遺跡は、南陽市大字上野字上野4他に所在します。遺跡は南陽市役所から北東へ約750m、吉野川から東に約250mの、上野集落から南側に張出す河岸段丘を中心とした地点に立地します。標高は約235～250mを測ります。現況は水田や畑地、果樹園等になっています。

上野遺跡の所在する南陽市は、県内最大の国史跡稲荷

森古墳など、著名な古墳が数多く分布しています。上野遺跡周辺にも、終末期の古墳群である蒲生田古墳群、上野山古墳群、二色根古墳群、烏帽子山古墳群等が分布します。中世の城館跡では、遺跡南東に標高341mの二色根館が築かれていました。この城は、伊達氏以前から要害の地として軍事的な拠点であった場所です。吉野川の対岸には、蒲生田館、若狭郷屋敷遺跡、中落合館があります。鎌倉時代に置賜地方は長井氏の勢力下にありましたが、天授6年(1380)頃に降室町時代にかけて、伊達氏が支配していました。天正19年(1591)に伊達政宗が陸奥岩出山へ転封となり、置賜は一時蒲生氏領となりましたが、慶長3年(1598)以降、江戸時代を通じて上杉氏領となりました。



第2図 9区SD436 遺構精査状況



第3図 遺構配置図作成状況（平板測量）



第4図 9区SD433 遺構精査状況



上野遺跡遺構平面図

### 3 検出された遺構

今回調査した8区および9区で検出された遺構は、数本の河川（または溝）跡と10数基の杭跡および土坑、そして数基の性格不明遺構などであり、掘立柱建物跡と認められる柱穴は検出されませんでした。掘り方と柱痕が確認できた柱穴は、8区のSP412くらいであり、他の多くの柱穴は掘り方と柱痕が不明瞭で、覆土も水田の耕作土に似ていることから、現代における開田の際に掘られたものではないかと考えられます。

遺跡における基本層序は、にぶい黄橙色の粗砂と礫からなる岩盤層の上に、黒色粘土質シルト・灰黄褐色砂質シルト・水田耕作土である表土層が順に重なる構成になっています。遺構の分布については、灰黄褐色砂質シルト層にあたる8区南西部から9区北東部にかけて比較的密度が濃く、にぶい黄橙色の粗砂と礫からなる岩盤層にあたる8区の北西部と9区の南東部については大変希薄な様相を呈しています。すべての遺構は、表土下の灰黄褐色砂質シルト層から検出されており、特に8区の北西部については、この層が開田の際に削平されたために遺構の検出が困難であったものと考えられます。

昨年度実施された第一次調査の結果から、中世・近世の遺構、特に掘立柱建物跡の検出が期待されましたが、今回の第二次調査前半においては、昨年度の調査と直接関連付けられる遺構は検出されませんでした。遺物の出土する遺構に限られていることから、各遺構の時代特定が難しい状況です。今後、各遺構から出土した杭材や炭化物および採取した土壌サンプル等を手がかりとして、各遺構のおおよその時代と特性を明らかにしていきたいと考えています。



第5図 8区SD425断面



第6図 9区SX428断面



第7図 9区SP413 杭材検出



第8図 8区柱穴断面



第9図 9区SD433断面

### 4 出土した遺物

縄文時代の遺物としては、石器が数点出土しています。どれも表土除去の際に出土したもので、石筥・搔器・剥片・石核などが認められます。また、ドングリ等の木の実を播り潰したりするときに使用したと考えられる石器も出土しています。

古代（奈良・平安時代）の遺物としては、須恵器片が2点ほど出土しています。それぞれ杯の蓋・甕の破片と思われます。これらもすべて表土除去の際に出土したものです。このうち、須恵器甕片には、内側に釉が施されています。焼成時に灰が内側に付着したことによるものと思われます。これらの特徴を手がかりに、これからより詳細な製作地や製作年代等の特定をしていきたいと考えています。

中世・近世の遺物としては、陶磁器が十数点出土しています。中世の遺物には、12～13世紀（鎌倉時代に相当）のものと思われる中国龍泉窯産の青磁碗と、中世陶器の2点があります。このうち、青磁碗の内側には劃花文と呼ばれる片切り彫りの文様が施されています。近世の遺物には、在地の陶器・色絵の段重（重箱。食品や化粧品等の容器として使われたもの。）・碗や皿等の各種磁器があります。伊万里や波佐見産の二重網目文碗や草花文の碗や皿が出土しています。

その他に、杭材と思われる木製品が9区SP413から出土しています。遺跡・遺構の時代特定の手がかりとなるものですので、今後理化学的資料分析により、材質及び使用年代を特定していきたいと考えています。



第10図 8区遺構検出状況



第11図 縄文石器



第12図 須恵器・青磁・中世陶器



第13図 近世磁器



第14図 杭材